



AI が進化する時代。 幸せに生きるために大切なこと

～「偏差値型教育」からの脱却の重要性～



偏差値型の教育から 探究的な学びへ・・・

そう話すのは慶応義塾大学大学院システムデザインマネジメント科ヒューマンラボ研究員、教育ジャーナリストでもあるマザークエスト代表の中曾根陽子さん。

彼女は数少ないお母さん目線に立つ教育ジャーナリストとして、長い間教育の世界を見て来られました。

その経験を通して、偏差値型の教育から探究的な学びへシフトしていくことが必要だと痛感し、ずっとそのような発信をされています。

これまでの常識や価値観が 通用しない時代の到来

コロナ禍を経て、働き方も変わってきました。副業を認める企業も増え、好きなことで、得意なことで、しかもそれが社会から必要とされていて、お金を稼げる・・・そんなことも可能な時代になって

きたのです。

そんな時代に「自分は何が好きか・何がしたいか・何ができるか」を知っている人は幸せです。

しかし、「自分の好きなこと、やりたいことはこれ」と分かっている、毎日をワクワクしながら暮らしている大人はどのくらいいるのでしょうか。

何となく違うなと思っていても、みんなに合わせていたほうが楽し、安全です。

しかしそんな生き方をしているうちに、自分は何が好きなのか、本当は何がしたいのかが分からなくなってしまう、毎日なんとなく過ごしているけれど、幸せを感じられない・・・そんな大人があふれているように思います。

しかし、子どもたちが生きる時代は違います、入試でも、学校でも、職場でも、「あなたはどうか考えるのですか」「あなたはどうかしたいのですか」ということが問わ

れ、自分の意見をしっかりと伝える人が評価されるようになっていくのです。

大学の入試の6割が 総合型選抜に

一例として、大学入試はすでに変わってきています。年内入試といわれる、総合型選抜が全体の6割に達しているのだそうです。

これは、ペーパーテストの成績ではなく、受験生の探究心・意欲を見る制度です。大学が欲しているのは、物事に主体的に取り組んでいく意欲や姿勢です。今後は、受験でも偏差値的な学力より、「意欲」や「学んだことを人生や社会に活かそうとする学びに向かう姿勢」が重要視されていくのです。

その1番の理由は、多様な学生を集めたいということです。今大学は、世界に引けを取らない研究拠点として新たな価値を創造することが求められています。しかし、ペーパーテストという1つの物差

しだけでは、一面的な能力しか測れず、学生の質も画一的になってしまいます。

あらゆるところで多様性が求められるようになってきている今、「多面的・総合的な評価」が重んじられるようになってきているのです。

自分の中から出てくる やる気ほど強いものはない

これまで推薦入試やAO入試というと、一般入試より楽に合格できるというイメージがあったかもしれませんが、今は変わっています。

例えば、京都大学が実施している「特色入試」は、「意欲、買います」というキャッチコピーの通り、学びへの意欲を重視しています。

入学後に大学が定めたカリキュラムについていけるだけの学力はもちろん必要ですが、それ以外に高等学校での活動内容についてまとめた「学びの報告書」や、京都大学で何を学びたいのか、卒業後に何をしたいのかといった、「学びの設計書」を提出しなければなりません。つまり、自分は「何が好きで、何がしたくて、何ができるか」ということを、きちんと言葉にして論じられる力が必要なのです。

そんな入試を突破する学生は、当然やる気があるので、入学後はそれぞれの「やりたい！」ことにまい進していきます。

「高校時代の探究活動や学習、部活動、生徒会活動、ボランティア、資格取得、課外活動など高校3年間に主体的に取り組んだ活動や成果を多面的・総合的に評価する」という総合型選抜は、付け焼き刃の入試対策で何とかできるものではありません。

反対に、日頃から自分の好きなことや興味のあることに意欲的に取り組んできた結果が評価されるので、自分のやりたいことに一生懸命取り組んできた子どもにとっては、またとないチャンスになります。

自分らしく生きられる 力を育てよう

もちろん大学入試が変わるから、やりたいことを見つけようと言っているわけではありません。

しかし、「自分は何が好きか・何がしたいか・何ができるか」を探究していくことが、結果的にお子さんの将来の道を開くことにつながる時代になってきたことは間違いありません。

だからこそ、お子さん自身が、自分らしく生きられる力を育ててほしいのです。

そのためにできることは何でしょうか？ 実は、親の関わり方がキーになるのです。

子育てこそが「探究」

わが子に「何が好きか、何がしたいか、何ができるか」を見つけたいか、わが子が**自分と**

向き合う環境を家族がいかに作るかです。

自分と向き合う環境・・・つまり自分の意志で行動させ、学生の間に安全に失敗をたくさんさせ、その中から色々と学ばせるのです。

つまり、失敗しないように・うまくできるように親が先回りして口や手を出している、わが子が自分と向き合い、成長する芽を摘んでしまうこととなるのです。

わが子が失敗したり、うまくいなくて落ち込む姿は親としては辛いものです。

だからと言ってそれを避けるような行動を親が取ってしまうと、大人になった時、辛い思いをしまうのは子供本人だということ肝に銘じないといけません。

「失敗ばかりしていたら自己肯定感の低い子になりませんか？」

という声が聞こえてきそうですが、失敗した後に『次はどうしたら失敗しないか』を考え、行動に移すことが重要です。

いつも言っている先回りのその一言、グッと我慢してみませんか？

※注意が必要なのは、「好きなことだけ、好きなだけやらせる」ということではありません。やりたいこと、やるべきこと（勉強や身の周りのことなど）のバランスは親がコントロールしてあげる必要があります。